

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.112

2009/2/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
 郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1jca.apc.org/iken30
 * 毎月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円

渡辺武は帝国美校時代、前衛グループのリーダー格だった。人望厚く、後輩たちから慕われ、いろんな相談をもちかけられた。

芸術のこと、恋愛のこと、家族のこと……しかし、話が戦争におよぶと武は口ごもった。

やがて応召し、沖繩に発つて数ヵ月後、

「嵐の日が間近になる様な予感がする。自分の作品をできるだけ散らさないように」

死を予期したのか、妻あてにそんな手紙がとまった。

残った絵の具をぜんぶ使い果たしてから死にたい、というのが武のログセだったのに。



渡辺 武「人々」

(無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)

(窪島誠一郎「無言館を訪ねて 戦没画 学生「祈りの絵」第Ⅱ集」講談社刊より)

「市民の意見」112号 目次

緊急特集 ガザ

ガザ、そこから今、人間としてのモラルを問う声が
 発せられている 清末愛砂 4

私たちに残された最後のものを守るために

イスラエル政府への抗議と要求 サファ・ジューデー 6

市民の意見30の会・東京

占領、兵士、難民

ソシミ事件と『服従の心理』 吉川勇一 10

日々悪化する難民生活

37年目の「冬の兵士」 高遠菜穂子 田保寿一 15 12

運動の現場から

重慶大爆撃裁判 三角忠 24 22

さまざまな講演会に参加して

田母神論文に関連して

超憲法的重武装集団としての自衛隊 井上澄夫 26

海外派兵問題

海賊対策で海外派兵なんて 編集部 20

私の戦争体験(投稿)

戦争の思い出 田中翠 32

文化

詩「うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！」

回り回って 連載エッセイ⑨ 井上俊夫 鈴木一誌 2

「差別」を表現する

マンガ「ふしぎの国のありか」 まつだたえこ 有馬理恵 18 17 2

本の紹介『戦争サービスマン』 高橋武智 30 28

映画紹介『シリアの花嫁』 本野義雄 17 18

その他

読者懇談会 9 インフォメーション

読者のおたより 33 事務局だより

無言館ツアーのお知らせ 35 編集後記/会計報告

◆本号のすべてのカット 吉岡セイ 36 34 31 ◆題字 安西賢誠

☆ 2月の緊急学習会のご案内 ☆

講師：早尾真紀さん 「ガザ侵攻—イスラエルはなぜガザを攻撃したのか—」
 日時：2009年2月5日(木) 午後6時半 参加費500円/場所：たんぽぽ舎(JR水道橋駅5分 ダイナミックビル5F)
 電話：03-3238-9035 地図ウェブ：http://www.tanpoposya.net/info/map.htm (地図はP29参照)

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

井上俊夫

昔の軍隊はいやなところだったという話をする

すかさず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがた元日本軍兵士は

新兵の頃はそうだったかもしれんが

三年兵、四年兵ともなれば

夜毎夜毎、下級の者に陰湿なリンチを加える喜びに

五体を震わせていたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

堪能するまで人を苛める楽しみを味わってみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

命令で異国の戦場へ引っぱり出されるのは

大変気が重かったという話をする

すかさず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは与えられた新品の三八式歩兵銃を

後生大事に抱きしめながら

いのちがけの無銭旅行もまた楽し

むこうへ行けば毛色の違った女を抱けるかもと

期待に胸はずませながら

輸送船に揺られていたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

日の丸の旗をはためかして殺人ツアーに出かけてみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

戦争で無益な殺生をしたくなかったという話をする

すかさず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは殺さなくともいい市民や捕虜の首をはねたり

銃剣で突き刺したり

生き埋めにしたりして

けっこう虐殺を楽しんでいたというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

思う存分人間を殺してみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

占領地の非戦闘員は大事にしたという話をする

すかさず、嘘だ嘘だと若々しい男の声が跳ね返ってくる。

あんたがたは若い女とみれば見境もなく強姦し

あとで悶着が起きないようにと

必ず女の胸に一発銃弾をぶちこんでいた

母を求めて泣き叫ぶ幼い子供だって

容赦しなかったというじゃないか

俺たちもたった一度でいいから

異国の女を犯してみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

戦争だけはやってはならない

今度戦争が起こつたら世も末だという話をする
すかさず、よけいなお世話だと

若々しい男の声が跳ね返ってくる。

俺たちが死のうと生きようとほっといてくれ

あんたがた年寄りがおためごかしに口にする

反戦平和論議なんかちゃんちゃらおかしい

そんなに戦争が嫌いなら

なぜ若い時に命を賭して反対しなかった

なぜ戦争に行ったのだ

なぜ人殺しをやったのだ

そもそもあんたがたに戦争に反対する資格があるのかよ

とにかく俺たちもたった一度でいいから

戦争というべらぼうに面白そうなものをやってみたい

うわ、おう、うわおう、うわ、うららら！

詩集『八十六歳の戦争論』（かもがわ出版）より



▼ 詩の作者について ▲

いのうえ・としお

(1922～2008)

大阪府寝屋川市生まれ。42年に徴兵され、中国で飛行師団の気象部隊に所属。戦後、中国の捕虜収容所で1年過ごし復員。57年、詩集「野にかかる虹」でH氏賞、農民詩人と評される。詩集「従軍慰安婦だったあなたへ」、エッセー「わが淀川」など。著書「八十歳の戦争論」では、軍隊生活について赤裸々につづった。06年、日本現代詩人会の先達詩人に選ばれた。

▼ 表紙絵の作者 ▲



渡辺 武

(わたなべ・たけし)

1916年(大正5年)11月3日、埼玉県北葛飾郡桜田村字上川崎で農家の長男として生まれる。1937年(昭和12年)、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)師範科卒業後、P. C. L.(現・東宝映画)美術部に勤務し、結婚。1938年(昭和13年)帝美最後の前衛グループ「ジュンヌ・オム」結成に参加、独立美術協会出品。1941年(昭和16年)、「青年美術家団体」を結成。1942年(昭和17年)美術文化協会参加。同年、応召。1943年(昭和18年)、沖縄・首里にて戦病死。享年二十七歳。

ガザ

昨年12月27日から一方的に攻撃され続けた、ガザ。空爆から22日後の1月18日、イスラエルは一方的に停戦を宣言。しかし数時間後、ハマスのロケット砲を理由に再び空爆を開始する。パレスチナほど「不条理」という言葉があてはまる場所はない。ミサイルの攻撃を受けて死んだ多くの子どもたちに死ななければならぬ理由があるとしたら、それは彼らが「パレスチナ人」だからか……

ガザ、そこから今、人間としてのモラルを問う声が発せられている

清末 愛砂

私は、過去に一度だけ空爆を自分の目で、

確認したことがある。イスラエルの占領下にあるパレスチナのヨルダン川西岸地区のパラータ難民キャンプに滞在していたとき

のことだ。軍用ヘリコプターから放たれる赤い光線が窓から外を見ていた私の視界のなかに入ってきた。時間がどれほどのものであったのか、どうしても思い出せないが、おそらくほんの数分の短いものであったはずだ。それが空からの攻撃であることに気がつくまで私は少しだけ時間を要した。人生でそのようなものを目にしたことがなかった私には、それが本やニュースなどではなかなか認識できなかったからである。ほどなくして「空爆」という言葉が頭のなかをよぎったとき、私がいる難民キャンプがそのときのターゲットにはなっていないように、ということを理解しつつも、激しい恐怖心がわきあがってくるのを抑えること

ができなかった。空爆が人の命を容易く奪うものであることくらい、私でも分かっていたからだ。

2008年12月27日、ガザ地区にイスラエル軍の戦闘機が空爆を開始した。イスラエルは、侵攻の目的をガザから周辺のイスラエルの街に対して行なわれているハマースによるロケット弾攻撃を阻止することにあると主張した。しかし、それはあまりにも見え透いた嘘だった。パレスチナに関わり始めて8年、私はイスラエルの同じ「言い訳」を聞き続けてきた。占領国が自分たちを被害者呼ばわりし、占領下に置いている人々を「テロリスト」と称して攻撃するいつものことだ。イスラエルがロケット弾攻撃を本当に問題であると感じているなら、なぜ占領をやめないのか。なぜ、封鎖をやめないのか。なぜ、ハマースと対話をしないのか。

外国人ジャーナリストがガザに入ること



をイスラエルが許可していないため、空爆開始後すぐには、その様子がガザの外に住む人びとにはなかなか伝えられなかった。そのうち、ガザ在住のパレスチナ人ジャーナリストや住民たちが無差別になされる攻撃に晒されながらも、死にものぐるいで撮影した写真や動画をインターネットを使って可能なかぎり、流し始めた。また、アルジャジーラ（カタールに本社を置くアラブ系の衛星放送）やBBC（英国放送協会）など大手のメディアで働くガザ在住のパレスチナ人の特派員の絶え間ない努力を通して、少しずつ、少しずつ、その様子が外に伝わるようになった。これらのジャーナリストや住民たちは、自分たちの生活空間であるガザが、圧倒的な力を誇る占領者による破壊の最中にあることを記録し、ガザの外に出し、世界に示そうとしたのだ。

それらの映像を通してみる空爆は、私



の脳裏のなかに残る赤い閃光とは規模がまったく異なるものだった。耳を劈(つんざ)くような轟音がすると、巨大な煙がもくもくとあがる。そして、次の轟音、次の轟音、次の……。電気がほとんどとまってしまったガザで、発電機を使いながらパソコンを動かし、インターネット経由で現地情報を伝えるジャーナリストや市民の手記には、わずか365平方キロほどの面積しかない小さなガザに、イスラエルの戦闘機によるミサイルの雨が降り注がれている様子が、その下にいる者の視点から描かれている。生身の人間の身体にミサイルを落されている者の恐怖心、怒り、流れ出る血と涙、そして正義を求める声。

ガザは、猫の額ほどの土地に約150万人が住んでいることから推測できる。最も人口密度が高いといわれている。そこにミサイルの一つでも落とされたら、その下でどれほど多くの人びとが犠牲になるか、想像に難くない。負傷者を病院に搬送する必要があっても、燃料

がなければ救急車は走らない。砲撃下をかくぐつて病院にたどりついて、イスラエルによって一年以上の封鎖を強いられてきたガザの病院に残されている医療品は極めて限られている。シファア病院でボランティア医師をしているノルウェー人医師によると、その残り少ない医療品も底が尽きようとしている。透析なしには生きることができない患者はどうするのか。難産が予想される妊娠女性は、どこで産めばいいのか。

軍事攻撃開始から9日目の2009年1月4日空爆数が800回を超えた。さらには、同日、ガザ住民がおそらく最も恐れていたことが起きた。イスラエル軍がついに地上戦を始めたのである。戦車がガザのなかに続々と入っていく。なんてことだ。今までに破壊された建物には、ガザ・イスラーム大学、モスク、一般住居、子どもたちの遊び場などが含まれている。1月6日には、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が運営する学校のうち3カ所が砲撃された。これらの学校は封鎖状態にあるガザで、戦火を逃れる術をもたない住民たちが、生き残りをかけて避難していた場所だった。数百人の避難民のうち、瞬く間に46人が殺され、多数の人々が負傷した。信じがたい事態である。

ガザ人口の68%は、1948年のイスラエルの建国の前後で故郷を追放された難民

である。これらの難民たちは故郷への帰還を待ち望みながら、イスラエルの苛酷な占領下で生きてきた。今回の攻撃にいたるまで、ガザ住民は繰り返し、繰り返し軍事侵攻を受け、破壊と虐殺を経験してきた。土地や家を奪われ、難民となった人びとが何度も家を失うということ。それは、避難先すら「避難先」とならなかったことを意味している。「野外監獄」と揶揄される封鎖下のガザで、今、これらの難民たちは再びイスラエル軍の包囲下におかれ、信じがたい規模の軍事攻撃を受けている。これは現在進行形のパレスチナ人に対するエスニック・クレンジング(民族浄化)にほかならない。追放と虐殺のパレスチナの歴史に、また一つ虐殺の記憶が加えられたのだ。

この原稿を書いている現在もイスラエル軍による爆撃は続き、地上戦はガザ市の中心部に移りつつある。パレスチナ人の死者数は900人を、負傷者数も4000人を超えた(7頁の注参照)。誰かイスラエル軍の暴挙を止めてくれ。ガザの人びとはそう叫んでいるはずだ。なぜ、被害者が被害を受け続けなければならないのか。世界はなぜ我々を見殺しにするのか。自分たちの死に無関心でいいいでくれ。我々は生きている人間だ。そう、ガザから、今、人間としてのモラルを問う声が発せられている。ガザの外に住む(私たち)に向けて。

(きよすえ・あいさ、鳥根大学教員)

私たちに残された最後のものを守るために

サファ・ジューデー

街が瓦礫に変わった

1月3日の夜、私たちは悟った。イスラエルの戦争大臣エフロード・バラクの言葉に正しいと言えるものがあるとしたら、それは唯一、この侵攻が長いものになるということだ。こちらの時間で午後9時15分、イスラエル軍は3つの地点からガザ地区に入ってきた。F-16が上空から掩護(えんご)する中、ガザ市の東、そして、北部のジャバリヤとベイト・ラヒヤから、パレスチナの人々が住む地域に戦車隊が進軍してきた。同じ時刻に、ガザ最南端のラファにも、東南から戦車と歩兵部隊が侵入した。ガザ市のミントル地区には戦車砲と大砲の砲弾が雨あられと襲いかかり、海からもガザ市に向かって戦艦からの一斉砲撃が起こった。ガザ地区全域が包囲され、ミサイルと大砲の猛烈な攻撃が続いた。

多くの住人は、地上侵攻が始まったことさえ気づかず、その間ずっと、イスラエル軍の空爆が激しさを増しただけだと思っていた。ガザ市はこの数日間、停電が続いていて、どの家のラジオも電池が切れかかっていたのだ。すでに1週間以上、ガザ市のほぼ全住民が家に閉じ込められた状態で過

ごし、開いている店など1軒もない。ニュースは口伝で伝わってくる話に頼るしかなく、自家発電装置を持っていて、なおかつ燃料が残っているという幸運な人はごくごくわずかしかない。このうえなく厳しい、絶望的な状況に置かれたこの今、武器など持っていない一般の人たちに猛烈な爆撃が浴びせられている。

地上戦に先立つ8日間、イスラエル軍は、完全に無防備な人びと(その4分の3は女性と子どもだ)相手に、世界で最も進んだ軍事力をシステマティックに、思う存分ふるいつづけた。気力・体力とも限界に達した状態で、住民たちは、途方もない喪失感と焦燥感にさいなまれながら必死に耐えている。言うまでもなく、18カ月に及ぶ封鎖で、ガザはすでに、これ以上持ちこたえるのもほとんど不可能な状態に追い込まれていた。この数日間で、私たちは10以上のモスク、聖なる礼拝の場所が爆撃を受けるのをまのあたりにした。ほとんどが、中で人びとが祈りを捧げている時のことだった。私たちは、瓦礫の下から子どもたちが引きずり出されるのをまのあたりにした。その小さな体の中で折れていない骨はただの1本もないように見えた。私たちは、血まみれの死

体と最後の息を引き取る人たちであふれかえっている病院をまのあたりにした。空爆を受けた現場で懸命の蘇生処置を受けている友人たちの姿をTVで見た。何家族もの家族全員がミサイルの一撃で地面もろとも吹き飛ばされるのを見た。私たちの街が、家が、近隣の地域一帯が、とてつもない破壊行為によって、何だったのかもわからない瓦礫の山に変じていくのをまのあたりにしてきた。

私たちはひとつ

これだけのことをやっておきながら、イスラエルは声高に、この攻撃は民間人を対象にしたものではない、これはハマースの政治・軍事部門に対する戦争であると強固に言いつづけている。一方の私たち、ガザの住民は、全員が、およそ人間に耐えられないはずもない恐怖と暴力を一身に受けつづけている。もしかしたら、イスラエル軍は、自分たちが作り出した妄想を真実だと思いつくようになり、その妄想のもとに行動しているのではないか。そんな思いすら浮かびはじめています。イスラエルは私たちの家に入り込み、私たちの街で私たちを攻撃し、私たちに向けて全開の暴虐さを発揮しつづけている。いったい、私たちは、どう対応するのが当然だと思われるのか？

今、ガザでは、パレスチナのすべての派